(45) 『同志社女子部の百年』昭和五三年、一九〇頁。
(46) 『新聞集成明治編年史』第四巻、一九八頁。
(47) 関重広著、『わが家の歴史』二一頁。
(48) ベルツ、『ベルツの日記』昭和二六年、一一二頁。
(49) 山崎朋子、上笙一郎著、『光ほのかなれども—徳永恕の生涯』、昭和五五年、九〇頁。
(50) 山崎孝子著、『津田梅子』昭和三七年、一六一頁。
(51) 山崎朋子、上笙一郎、前掲書。
(52) 石井亮一についての詳細は、『石井亮一伝』(復刻版は『精神薄弱者福祉思想研究叢書Ⅱ、石井亮一の部、昭和四九年)参照。
(53) 『穂積歌子』、二四三頁。
(54) 唐沢富太郎著、『女子学生の歴史』昭和五四年、一九頁。
(55) 『明治五年官員全書』(壬申五月五日改)参照。
(56) 中島翠堂輯『官員鑑』(明治九年五月)参照。
(57) 『法曹百年史』昭和四四年、一一八六頁。
(58) Margaret C. Griffis, "Diary", June 16, 1874. (ラトガース大学図書館所蔵グリフィス・コレクション)マイクロフィルムが京都大学図書館にある。
(59) 同右。
(60) 『新聞集成明治編年史』第二巻、一三八頁。
(61) 「E・H・ハウス」『近代文学研究叢書』第五巻、昭和三十二年、三八七頁。
(62) 同右、三九二頁。
(63) 黒田初子、「明治の母」『母たちの世代』昭和五六年、一七四—一八〇頁。
(64) E. H. House, "A Child of Japan or The Story of Yone Santo," London, pp. 5~70.
(65) 『新聞集成明治編年史』第一巻、四二九頁。
(66) ウィリアム・E・グリフィスは、東京女学校が発展して華族女学校になったとその著書で誤った指摘をしている。(W. E. Griffis, "Verbeck of Japan," 1901, p. 222 参照。)

ムに撮つたもの（国立教育研究所の金子忠史氏が撮影、京都大学図書館所蔵）である。

(5) 幕末期のオランダ留学生の派遣については、石附実著『近代日本の海外留学史』昭和四七年、十二頁―二七頁参照。

(6) 津田道治著、『津田貞通』昭和十五年、年譜、一六九―一七二頁。

(7) 同右、二四頁。

(8) 同右、二四頁。

(9) 同右、四〇頁。

(10) 同右、九七頁。

(11) 同右、口絵写真の説明に「帰朝後ヒッセリング博士に送りしもの、真道四十五才頃、恭仁子十三才頃、明治六年写」とある。

(12) 同右、目次のあとの系図参照。

(13) 杉享二については、河合利安著『杉享二自叙伝』（一九一八）がくわしいが、その他に杉勇「祖父、杉享二のことども」（『統計学』一九七七年九月）がある。

(14) 『静岡県教育史』通史篇上巻、昭和四七年、一六九頁。

(15) 三潴信邦「杉享二の職業分類」（『書斎の窓』一九八三年十月、三二八号、四九―五五頁）

(16) ワイコッフ（Martin Wyckoff）の夫人。

(17) 鳩山春子『自叙伝』昭和四年、『日本人の自伝』7所収、平凡社、一九八一年、二五五頁。

(18) 秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』一九八一年、一九二頁。

(19) 『手島精一先生伝』昭和四年、二五七頁。

(20) 秦郁彦、前掲書、一五六頁。

(21) 蘆谷重常著、『穂積歌子』昭和九年、八三―一〇七頁。

(22) 石附実、前掲書、一九八頁。

(23) 『高峰秀夫先生伝』大正十年、一七六頁。

(24) 同右。

(25) 同右。

(26) 同右、一七四頁。

(27) 『園田孝吉伝』大正十五年、三二六頁。

(28) 『日本の英学一〇〇年明治篇』一九六八年、四二六頁。

(29) 同右。

(30) 富永クミの英作文もあるが、今回は報告していない。クミの他にも長姉敏子がおり、フランス留学から帰国した河津祐之と結婚。

(31) 『園田孝吉伝』三二七頁。

(32) 同右、三二八頁。

(33) 同右、三三〇―三三一頁。

(34) 同右、八八頁。

(35) 同右、八六頁。

(36) 小室英夫、『七十路の牛歩』昭和三五年、五頁。

(37) 同右。

(38) ジョセフ・オグデンはイギリス人で工部省鉄道寮に雇われた。明治七年来日。

(39) フレデリック・ストレンジはイギリス人で明治七年、東京大学予備門で英語を教えた。これらオグデン、ストレンジ、さらに後述のハウスなどは、臨時に東京女学校で教えた。東京女学校に雇われた正式のお雇い外国人は、ヴィーダー妻（明治五年―六年八月）、マーガレット・グリフィス（明治六年三月―七年九月）、クララ・ライス（明治七年九月―十年二月）の三名である。『資料御雇外国人』昭和五〇年二二〇ページ、二六四ページ、四四八ページ参照。

(40) 愛知県立高等女学校は明治三六年に設立されているからこの時期の頃と思われる。

(41) 小室英夫、前掲書、九〇ページ。

(42) 巌谷大四著『波の瑳音―巌谷小波伝』、昭和四九年、一一頁。

(43) 同右、二六頁。

(44) 富森幽香については、「富森幽香」『同志社時報』一九六九年、三四号、六〇―六四頁にくわしい。

政府が女子教育に指導的姿勢をとったことにおいて明治初期の特筆すべき特徴である。この政府による掛け声に呼応する者が、一般民衆の中に多くはいなかった。「何ヲ憚リテヤ願出ノ者稀ナル風聞アリ」（明治五年一月『新聞雑誌』二六）と報道されている通りである。[65]「学制」を準備した洋学派の啓蒙的官僚たちが、その子女を入学させたのは、ある意味では、彼らこそこの機会を待ち望んでいたからであろう。又維新後、妻と男児を東京に呼びよせ娘は郷里にとどまるケースが多い。作文をみると、殆んどの場合この東京女学校設立をきっかけとして娘が最後に上京し家族に合流している。旧幕臣の子女たちは、静岡―東京間を往復し、勤皇派の子女たちも、京都から最後に家族に加わっている。東京女学校設立は、新政府官僚の家族合流の契機をつくったといえよう。

次に、明治政府が送り出し、十年代前半に帰国した新政府の期待する帰国留学生にとって、当時漸く適令期に達していた東京女学校出の英学に秀でた女性たちは格好の結婚相手になったということである。東京女学校の設立は、男子の海外留学の代替機能を果したといえる。

第三に、渡辺筆のケースが示唆することは、「お姫様」の学校といわれたという東京女学校のエリート性の問題である。東京女学校は当初、共立女学校という名であり、文字通り四民に開かれた学校であって、旧藩主や家老の娘が入学したにしろ学校の本来の性格とは区別しなければならない。その意味で明治十八年設立の華族女学校とは設立の主旨を異にしている。[66]

しかも青木琴のケースで推察できることは父親の進歩的、開明的姿勢のおかげで入学しえた女学生たちも、社会的発達に先んじたレベルの学校で学ぶことは多くの苦難に自らが立ち向い切り開いていかなければならなかったということであろう。それが明治啓蒙期の落し子である東京女学校に入学した女性の義務であり特権でもあったといえよう。

（了）

**註**

(1) 最も代表的な研究は、文部省年報をくわしく分析した青山なを「官立東京女学校の歴史的意味」（『明治女学校の研究』、昭和四七年、五三七―五五六頁）、千住克己、「明治期女子教育の諸問題―官公立を中心として」（『明治の女子教育』、日本女子大学女子教育研究所、一九六七、八―四一頁）などがくわしい。

(2) 東京女学校の制度的側面、規則、学科目、教員数、生徒数、教科書名などは『文部省第一年報』（明治六年）一七四―一七五頁、同『第二年報』（明治七年）四五四―四五五頁、同『第三年報』五八三―五八四頁参照。

(3) マーガレット・グリフィス（一八三八―一九一三）はウィリアム・E・グリフィス（明治三年来日、福井藩、大学南校で理化学を教えた）の姉で明治五年から明治七年まで滞日、東京女学校で英語を教えた。グリフィス姉弟については、山下英一著『グリフィスと福井』（福井県郷土新書5、昭和五四年）、Edward R. Beauchamp, "An American Teacher in Early Meiji Japan", 1976 などがくわしい。

(4) マーガレット・グリフィスが明治七年に米国へ帰国の時持ち帰った女生徒の英文エッセイの現物は、すべてラトガース大学アレグサンダー図書館に所蔵されている。今回筆者が使ったのは、マイクロフィル

分たちの家より高いことから嫁姑の仲が悪かったこともあり、祖母はヨネにつらくあたる。ヨネたち家族が父親の待つ東京へと東海道を上ってくる途中、ある温泉宿でアメリカ人チャーウェルという医者と知りあい、彼はヨネという利発な少女がどういう女性に成長するのか見守りたいと願う。帰京後、ヨネの父が、温泉宿で世話になった礼にチャーウェルを訪問したことからつきあいが始まり、チャーウェルもヨネの家を訪ね、あんなに望んでいた学校はどうなっているのかと聞く。ヨネは知的好奇心が強いが同時に家族にやさしく従順であり、祖母の強い反対もあって見通しの暗いことを知ったチャーウェルは、その頃開校したばかりの最高レベルの女学校の入学手続きをしてやり、入学許可証を携えてヨネを訪ねる。あきらめかけていたヨネは、書類をみて顔色を変え激しく震え、押さえ切れずにすゝり泣くが涙は出ない。父親は経費のことが頭をかすめるが、新時代への理解もあり喜びを示す。強い攘夷思想をもつ祖母と二人の叔母は喜ばない。ヨネが学校に入ると家計にひゞき家事手伝いも十分させられないからだ。父親はヨネを愛していたから彼女の入学は実現する。しかし入学後も祖母の妨害意志は強く、女中を解雇する。ヨネは早起きして火の用意、朝食準備、祖母の着物の準備などをして登校する。やがて下男もやめさせるので、水仕事やまき割りも彼女がやるようになる。学校は遅刻が多いが成績が良いのでとがめられない。昼休みに予習復習する。下校後、夕食の準備などすべて彼女がする。勉強だけが彼女の楽しみで、十四才の彼女は年上の女学生のいる中で抜群だ。外国人教師がヨネのアカギレしてふくれ上っている手をみとがめるが彼女は「気をつけます」とくり返すのみである。ヨネは父親に不平をいわない。それがこの国の伝統なのだ。西南戦争の影響で、政府はこの女学校を廃校にし、やがてヨネは、祖母から、教養の低い船大工との結婚を迫られ、祖母の命令に従うことを義務と考えるヨネは、愛がなく専制的な山東頼吉（サントウヨリキチ）と結婚する。(64)

以上、物語の本筋ではないが青木琴に関連する部分の骨子を紹介した。この小説でハウスは明治初期の社会や道徳にしばられた女性を描こうとしたのであろう。小説であるから事実そのままでないことは当然であろうが、青木琴の作文の背後にある複雑な問題を推察させるには十分である。「お姫様の学校」といわれた東京女学校にもこのような境遇のもとで勉学に意欲を燃やした女学生がいたであろうことはうなづけるし、決して青木琴個人の特殊な家族関係に原因するのではなく、広く当時の新旧女性観の相剋が時代相として在ったことを象徴しているといえよう。

## むすび

以上、東京女学校に学んだ八名の女学生の生いたちとその後をたどってきた。一人一人に残っている文献の性格に違いがあるため、各人によって判明したことに偏りがあるが、総じてみると、次のようにいえよう。

近代女子教育の政府による最初の作品である東京女学校の設立は

こられなくなって淋しかった。でも、あなたがとてもやさしく教えてくれるので今は幸せです。

一八七四年（明治七年）六月二十日（土）記」

明治十三年、渡辺筆がフランスに留学した同じ年、筆の同窓生青木琴は、一人のアメリカ人ジャーナリストの養女としてアメリカに渡った。このジャーナリストはE・H・ハウス（Edward Haward House）であり、青木琴の人生は東京女学校に学んだ女学生の中でも異色の存在である。

青木琴は安政五年（一八五八）、尾張藩にて生まれた。父信虎は、幕末維新期を京都、続いて東京に住み、明治四年、新政府の司法中判事[55]、同九年四等判事[56]を経て同十四年から十九年まで函館控訴裁判所長[57]になっている。

琴が上京するまでの経緯は作文でみる通りである。七才で初歩の読み書きを習っており、向学心に燃える少女であったらしく、上京後、英語の勉強をしたくてそのチャンスの訪れるのを待ちに待っていた様子が作文にあらわれている。マーガレット・グリフィスの日記（明治七年六月十六日の項）にも「シホ・ミツハシと、青木が聖書について聞きたいと訪れ、聖書を与えた。私の生徒の中で最も知的で思考力のある生徒である」[58]の記述がみられる。明治七年三月五日のマーガレットの日記には、「私の生徒の一人の青木が明日の晩、結婚する予定である。彼女の結婚衣裳は洋装である」[59]と記され、当時の新聞にも、「洋装の結婚式」と紹介されている[60]。しかしこの結婚はうまくいかず、苦悩の末、琴は命を絶とうと決心したが、その時、東京女学校で教えたことのある恩師ハウスが現われて助け、以後、彼の養女となったといわれる[61]。

ハウスは、明治四年来日し大学南校の英語の教師となり、明治五年頃、南校境内にある東京女学校の講師もかねた[62]。大隈重信の援助で明治十年、「トーキョー・タイムズ」（英字新聞）を創刊し、治外法権撤廃や条約改正を主張し、日本政府を弁護した。明治十三年帰米、同二十一年、ボストンで“A Child of Japan or The Story of Yone Santo”と題した小説を発表した。ヨネ・山東のモデルは青木琴である。明治二十六年、ハウスは琴と共に来日。宮内省雅楽部の、オーケストラの指導に以後専念し、明治三十四年病没している。その間、琴は黒田太久馬（陸軍大学フランス語教授）と結婚、知的好奇心は衰えず、合理的でモダンな家庭生活を送ったという[63]。

琴をモデルとして書いたといわれるハウスの小説の主人公ヨネ・山東は概略、次のような女性として描かれている。

ヨネは、最高の水準の官立女学校を卒業して珍らしく高度な知性を身につけるに至った。しかし、無知から啓蒙への経緯には必らず大きな困難と苦しみが伴なうことの生きた例ともいえる。女学校で欧米の社会の進んだ状態について理論的に親しむようになる一方で、もはや彼女にふさわしくなくなった現実社会へ投げ帰されるため、幸せになれない。

ヨネの家庭は家父長制家族で父親の権威は最高ではあるが家庭内の人間関係では祖母の権限が強く、亡くなったヨネの母の身分が自

監督ウィリアムス師の感化でキリスト教徒になった石井亮一は、生涯にわたって強い信仰に生きわが国精薄児教育の草分け的存在であるが[52]、筆子も、聖公会会員となって後半生に信仰を持った。

東京女学校時代の同窓であった穂積歌子は石井夫妻の事業に熱心な後援をし、経費を集めるために学園が催す観劇会へ寄附を申し出る筆子宛の手紙が残っている。「御事業の為常に御元気に御活動なされ候御事、誠に恐入候ことに存上候[53]」と歌子は書いており、筆子が、前半生の「社交界の花」から、社会事業家に成長して活動していたことがうかがわれる。

東京女学校を称して「お姫様の学校[54]」と呼ぶことがあるが、渡辺筆は少女時代のお姫様と「社交界の花」から脱皮して、地味な社会事業に後半生をかけたといえよう。

## 五、お雇い外国人の養女として

### (1) 青木　琴（満十六才）

「私の郷里は尾張で、東京の四分の一位の広さである。尾張には小さい美しい町がいくつかあり、土地の人々の気性は正直で親切、それに温和であって婦人は帯を締めずに外に出たりしない。東京では夏に帯もつけず衣服を身に着けない婦人をみかけ行儀が悪い。郷里についてもっと書きたいが、幼かったので、詳しくは覚えていない。私の両親はとても可愛がってくれたが、母は私の三才の時亡くなった。だから私は母の顔を知らないが、父の話では、私の足が立たず歩けないので心配しつゝ亡くなったが、彼女の亡くなった次の日の朝に立てるようになり、父と祖父母は母のために悲しみにくれたという。母の亡くなった翌月、私は激しい頭痛がして医者も見放したが、父は悲しみ、回復した時、とても喜んだそうだ。

四年後（七才）私は読み書きを習いに先生の所に毎日通ったが、その頃父は京都詰めとなり、次の年には東京へ行ってしまった。父から手紙が来て「もし上京したければ奉公人と一緒にくるように」とあり、私はとても嬉しくて、祖父母に「とても行きたいけれど、許して頂けますか」とお願いした。祖父母は「行くことはいいが、朝廷と幕府の間に戦いが起ると聞いたので、それでもかまわなければ行きなさい」といった。私は少し不安になり「とても恐いので待ちます」と答えた。二年後に東京で戦いが始まったがこれについてはあなた（M・グリフィス）もよく御存知の通りである。翌年に平和が訪れ、東海道をやってきた。駿河に着いた時、富士山がみえてとても嬉しかった。東京に来て思ったことは、町が尾張よりもずっと汚ないことだった。父と再会してお互いに喜びあった。毎日、有名な場所をあちこち見てまわった。父が、「見物が終ったら勉強を始めなさい」といい、私は、「私もそう願っています。英語を勉強したいので、いい先生をどうか見つけて下さい」とお願いした。でもなかなか先生が見つからず、私は毎日待ちに待つ日が続いた。ある日父の友人が訪れ、女学校ができることを教えてくれ、私は非常に喜んだ。父が私を入学させてくれ、この女学校でヴィーダー夫人がとても親切にしてくれ嬉しかったが昨年（明治六年）から彼女が

## 四、「お姫さま」から社会事業家へ

### (1) 渡辺　筆（満十四才）

「私は一八六〇年四月二十七日に生れた。生後、私は母よりも祖母の手で育てられたので三才の頃に祖母が病気になった時は悲しかった。病気が回復した後も彼女はそれ程健康ではなかった。四才の時、私は重病にかゝり医者が見放したので母と祖母は悲しがったが、二年を経て健康を取り戻した。七才の時学校に入ったが本が読めなかった。十一才の時、母は東京に行き私も一緒に行きたかったが弟だけ一緒につれて行き悲しかった。十二才の時、祖父母や叔母と共に大阪へ行き、続いて六月に東京に来た。六ヶ月間は、我家がこれまで仕えていた旧大名の家に滞在して、私はそこの娘たちと遊んで過し、昨年家に戻った。

一八七四（明治七年）六月二十日　第四学級」

渡辺筆の父渡辺清は九州大村藩（長崎県）の藩士で、弟昇とともに維新の際勤皇党として活躍、江戸城明け渡しのとき、西郷隆盛の副使として勝安房と談判して無事受け渡しを完了したことで知られている。明治八年福岡県令となり後、貴族院議員となった。筆の作文でわかるように幼時を母や祖母と共に故郷で過し、明治に入ってからまず母が上京し、続いて娘筆が上京して明治六年に東京女学校に入学している。筆は、東京女学校廃校後、明治十三年四月、フランスに留学しており、当時はめづらしかったらしく新聞に出ている。

「福岡県令渡辺清君の令嬢筆子女史には、今度九重の綾にかしこき皇后の命に奉じ、海外へ留外せらるゝことゝなり、旧大村藩主と共に頃日仏国の郵便船に搭じ、先づ伊太利をさして航行せらるゝといふ」[46]

帰国後、同郷の小鹿島果と結婚し鹿鳴館時代、社交界の花とうたわれた。[47]『ベルツの日記』の明治二十二年三月二日の項に、その夜の舞踏会で「日本の一女性の出現によりすっかり魅了されたが、それは小鹿島夫人で、自分が今までに出逢った最も魅力ある女性の一人」であり、「夫人は達者に英語、フランス語、オランダ語をしゃべった」と記されている。[48]夫小鹿島果は政府官僚であったが、『日本災異志』（明治二十七年・日本鉱業会）一巻を残して病没した。この著時は日本の飢饉・火災・地震、霖雨（りんう）・疫癘（えきれい）などの編年的記録の名著といわれている。[49]

夫の没後、筆は華族女学校教諭及び幼稚園主事となり、併せて麹町の静修女学校長となって女子教育に専心し、明治三十一年には米国で開催された万国婦人連合大会に日本代表として津田梅子と共に出席している。[50]帰国後、筆は華族女学校をやめ石井亮一と再婚、石井筆子となって精神薄弱児施設滝之川学園を経営していた夫の仕事を手伝って、精薄児教育に没頭し、昭和十二年夫の没後は、自ら園長となっている。筆子が石井亮一と出会うきっかけは、小鹿島果との間に生まれた二人の娘が共に知能障害をもっていたため、滝之川学園にあずけたことから発している。[51]立教大学在学中に日本聖公会

会津藩出身。大学南校、同人社などで学んだ後、師範学校や県立中学校で数学、理化学の教師として山口、広島、青森、埼玉、名古屋などで教鞭をとっている。房栄は名古屋在任中に、勝間田稔知事の依嘱により婦人共益会なるものを設立して官公吏の妻、娘などに普通学、英学、編物等を教えたが、勝間田知事は、この成果から愛知に女学校設立を決意し規則作りなどの準備に小室夫妻が協力したという。(40)

尚、房栄は、東京女学校在学中の明治六年十月一日に彼女を可愛がってくれたヘボン（J. C. Hepburn）より、彼のつくった『和英語林集成』（一八六七、上海）を贈られ、彼のロマ書講義で信仰を得ている。(41)

京都から上京したもう一人の少女、巌谷幽香の父修は近江国水口藩の藩医の出で自らも十八才で藩医となったが、維新後上京して、新政府に仕え、元老院議官を経て貴族院議員になった。児童文学者、巌谷小波は、幽香の弟である。幽香は慶応元年（一八六五）一月に水口村にて生まれた。明治三年三月、母親が上京するが同年十月に肺炎を併発して死去する。(42) 幽香は東京女学校で五年間学んで、廃校後は他の生徒の多くが女子師範学校に転校したのに対し、別のコース、つまり跡見女学校に一年間学んでいる。翌明治十二年、父方の祖母利子の住む京都に妹三千尾と共に行儀見習いのため帰る。(43) まもなく関西鉄道会社常務の西村篤と結婚、富森助左衛門（四十七士の一人として討入り、切腹）の親戚にあたる両家が結婚して富森姓を名のるようになった。(44) 以下、中嶋静恵『富森幽香』に拠り彼女の歩んだ道を要約する。

結婚後、三男二女を生み家庭の主婦として専念するが、この間明治二十年以後、京都の平安教会で牧師松山高吉から洗礼を受けている。幽香が三十六才の時（明治三十四年）二年間、ハワイへ一家移住しており、病身で静養中の夫にかわってはじめて外へ出て働きはじめる。日本人メソディスト教会（牧師・本川源之助）の婦人伝道師兼婦人ホームの監督となったのである。明治三十六年、未亡人となった彼女は、郷里近江水口伝道所の伝道師になるが、彼女の英語力や豊かな新知識が魅力となって多くの青年が集まったという。明治四十年、同志社女学校平安寮舎監に就任、同時に修身科授業を担当した。又、同志社教会の役員や日曜学校（女学生対象）教師になるなど、同志社の宗教教育を支える重要な役割を果した。当時の同志社の一寮生は、「金曜日の夜の祈祷会にも全員で富森幽香先生が先頭に提燈を持って列をして今出川通をチャペルに行った」(45)とその思い出をのべている。昭和五年（一九三〇）、六五才で退職するまで二十五年間を、教師・舎監として働いた。

以上、京都出身の二人の女学生の歩んだ道を見ると、共通点として、クリスチャンとなって、人生の一時期を教師・舎監となって働いたこと、さらに、それぞれの地方でのグループリーダー（房栄の名古屋での婦人共益会主宰、及び幽香の水口伝道所での活動）となってその教養を活用したことなどが挙げられる。特に富森幽香が四十才になってから、教師・舎監として後半生を過したことは、次節でみる渡辺筆と並んで、異色ある存在といえよう。

病気になるととても心配した。病気になると私は彼女の家のある田舎に行き毎日外で遊び丘に登り、花を摘んだ。田舎が大好きだ。乳母の家は大きくて、男の子が一人おり、みんな親切にしてくれた。たくさんのおもちゃや人形で遊び、外でははだしで遊んだ。

六才になって習字をはじめた。九才の時、父が天皇と共に東京へ行き、十一才の時に母が弟と弟の乳母をつれて上京した。十二才の時、英語を学ぶために学校へ三ヵ月通った後、昨年上京してこの女学校に入った。

一八七四年（明治七年）六月二十日記」

**(2) 巌谷幽香（満九才）**

「私は近江で生まれ、二、三ヵ月後、京都へ移った。幼時、門の外へ出て肩を蜂に刺された時母が薬草をぬってくれた。三才まで母乳を飲んだ。当時二人の兄と三人の姉妹がおり母が芝居が好きで私や妹をつれて行ってくれた。芝居の途中で妹が泣いたりすると、女中が困った。五才の時母が上京したが子供が多いので私は祖母のもとに残った。母の亡くなったことを知らせる手紙が東京から来て、祖母はとても泣いたが私は、友だちと遊んでいて祖母から聞いても泣かなかった。やがて私は叔母と上京し、継母がきた。弟が一人増え、三人の兄弟と三人の姉妹で六人になった。父は私を女学校に行かせようと考え、この学校に入学した。

一八七四年（明治七年）六月二十日　記」

明治元年九月二十日に明治天皇は岩倉具視らの諸役人や諸藩兵二千余人を従えて京都を出発し、十月三日江戸城に入ったが、この時天皇に供奉して東京に来た役人の中に、吉田倫理と巌谷修がいた。

吉田房栄の父倫理は左兵衛権大尉出羽介佐伯臣倫理のことで、吉田家は上皇附武官として仕えて来た。[36] 房栄は文久元年（一八六一）十二月に生れ、幼時は作文でわかるように農家の生活を楽しんでいる。父倫理が上京後、房栄は、祖父右兵衛大尉摂津介佐伯臣倫紀と共に京都で生活した。[37] 作文によると、二年後に母が上京し、房栄は祖父の家にとどまって学校へ三ヵ月通ったとある。これは、房栄の子息、小室英夫氏によると、明治五年に京都府が設立した新英学校および女紅場（土手町丸太町南）のことで、彼女は、英語をイーヴァンス夫人（Emily Evans）に習い、その他に習字、編物等を学んだという。東京女学校が創立されると、父倫理が迎えにきて上京。明治六年十二才の時であった。房栄の書いた履歴によると、東京女学校では、数学、地理、歴史、植物学、物理学、化学などを英語で学んだといい、教えてもらった外国人教師に、ミス・グリフィスやライス夫人など正規の教員の他に、オグデン[38]（J. Ogden）や、ストレンジ[39]（F. Strange）の名もあげている。東京女学校廃校後、房栄は東京女子師範学校に入学、卒業後、明治十六年から二年間は山手女学校に教頭として和普通学科を教え、舎監を兼ね、明治二十年から一年間は芝白金猿町の頌栄女学校（岡見清致が明治十八年創立したキリスト教主義女学校）で修身科と英語とを教えた。明治二十二年、小室真咲と結婚した。小室真咲（一八五三―一九一三）は

も古い女学校。明治九年廃校）で学んでおり、教育熱心な家庭であることがわかる。銈の姉、クミの作文によると、クミも芳英女塾に通ったあと十五才からフルベッキの娘に英語を習い、明治七年にやはり東京女学校に入学している。[30] 父発叔は娘の教育に熱心であったらしく、銈が明治十年の廃校後失望甚だしいのをみて、洋画を山岡成章に、英語を外人に、そして漢籍をと個人教授で勉学を続けさせている。[31] しかし同じ年、父が山口県に転任のため、銈も学業を中止して父に従い、山口では漢籍のみ学習を続けた。父は、銈の才に期待していたらしく、工部卿井上馨と親しかったので井上が山口に帰省した際、娘銈の教育について嘆願する。

『私は既に老いたる駑馬の如くかかる辺陬に朽つるとも更に遺憾には思ひませんが、唯子女たちは将来のため空しく学事を廃して草深く埋れさせるに忍びません。何とかよい方法はありますまいか。』[32]

かくて、井上卿が帰京の際、銈も上京し女子師範学校に入学する。山口県の父も経済的に不如意であったらしく、食費にすら事欠きながら、英語や絵画の勉強にうちこみ、「研学の権化」[33]のような奮励ぶりであったという。明治十三年に女子師範学校を卒業直後、井上馨の配下にあった園田孝吉と結婚した。園田孝吉は明治三年、鹿児島藩の貢進生として大学南校に学び、同五年外務十等出仕を任ぜられ、同七年英国公使館在勤、同十四年、英国領事に任ぜられ、明治二十二年まで英国在勤、以後実業界に転じ、正金銀行頭取、日本郵船株式会社取締役等を歴任した。

銈の親代りの井上馨が、園田に外交官の妻のあり方を次のように教え、銈を推せんした。

『すべて外交官といふものは、その成功の必須条件として良妻の選択といふことを度外に措いてはならない。外交官の本領は応酬辞礼の間に、談笑交驩しながら相手の機微秘計を看取し、国家の方策を立てるのであるが、交際場裡の花形は主人公たる外交官自身よりも寧ろその夫人である。』[34]

園田は親類から養家の娘の縁談を持ちかけられたのを断わって銈と結婚するのであるが、その時、彼は縁談の相手を単に田舎育ちだからという理由で拒絶するのは忍びないとしながらも、自分の志望は外交上有用の人物となり国家に尽したいということだからと述べて了解を求めている。[35] 明治十五年、領事として渡英する夫に従い、在英七年間、外交官夫人として立派にその役割を果した。

以上みてきたように、中村せんや富永銈は、教育界や外交界の国づくりのリーダーあるいはサブリーダーを夫に持つことによって、その自己の受けた明治初期の女学校教育を生かすことができたといえよう。

## 三、京都から来た女学生

### (1) 吉田房栄（満十二才）

「十二月生まれの私は、母の乳が出なかったので京都のはずれにある農家に一年間あづけられ乳母に育てられた。この乳母はとてもやさしくて私をかわいがってくれ、彼女の夫も良い人だった。私が

六才の時から母が字を教えてくれ、九才の時から芳英社で斎藤夫人から英語を学んだ。十才の時、築地のカロザース夫人から英語を学び、昨年（明治六年）、この女学校に入学した。」

杉陽が留学してきた平井晴二郎と結婚したように中村せんも留学帰朝した高峰秀夫と結婚した。この他にも、よく知られているように、鳩山春子は三浦和夫と結婚し、渋沢栄一の長女で東京女学校の開校当初から在学した渋沢歌子は、入江（穂積）陳重と結婚している。[21]

平井、三浦、入江の各留学生は、明治八年、お雇い外国人の漸次的削減とそれに代わる日本人教員や技術者の養成をはかる目的で政府が出した貸費留学制度にもとづき、開成学校から選抜された秀才たちであり、又、高峰秀夫は、師範教育伝習のため、伊沢修二、神津専三郎と共にその選の中に入った。当時、伊沢は官立愛知師範学校長であったが、高峰、神津はそれぞれ慶応義塾と同人社の秀才であったため選ばれた。[22] 高峰がニューヨーク州立オスウィゴー師範学校を卒業し、ペスタロッチ運動を学んで帰国し、我国の教育界の実際の思潮に伊沢修二と並んで大きな影響を与えたことは周知の通りである。明治十一年帰国し、東京師範学校雇を命ぜられ、同十四年同校校長になり、翌十五年、中村せんと結婚している。[23] 彼女は、旧豊橋藩主大河内家の家老であった中村清行を父として生れた。[24] 維新前後は国事に奔走する父と離れて、郷里豊橋で母たちと留守居を守って育ち、維新後に上京してはじめて父に会った経緯は作文に綴られている通りである。明治十年、東京女学校廃校後は、既述のように、杉陽、鳩山春子と共に、ワイコフ夫人から英学を学ぶ向学心のある少女であった。彼女は、『高峰秀夫先生伝』によれば「性敏慧にして貞淑、内助の功、訓育の力頗る著し。実に先生の家庭の円満清高なること、模範家庭と称せられたる程なりき」[25] と記されており、三男二女を得ている。高峰秀夫は、女子教育を盛んにすることによって、男尊女卑の弊風を改め、女子の国家、社会、家庭における価値を高めることに関心を持っていたが、これは彼が米国留学中にアメリカでの社会や家庭における女子の長所や美点に感銘を受けたことによるといわれている。[26] このような明治十年代のエリート青年たちと対等に理解しあえる女性として、東京女学校で学んだ女学生たちはそれにふさわしい伴侶となって行ったといえよう。

中村せんが教育界のリーダーと結婚したのに対し、次にのべる富永銈は、外交官である園田孝吉と結婚した。富永銈については『園田孝吉伝』（大正十五年）にくわしい。銈は、元治元年（一八六四）三月に、千葉県士族富永発叔三女として生れた。幕末期、父発叔は遠州横須賀城主西尾隠岐守の家老職にあり、佐幕派で一時禁獄されたが、銈は、父が下獄中に生れている。[27] 作文を書いた年は満十才であった。作文でわかるように、銈は東京女学校に入学する前に、私塾芳英女塾[28]（明治四年斎藤実堯によって神田雉子町に開設され、学科は英語と数学で正則と変則の二つのコースがあった）や、A六番女学校[29]（明治三十米国長老派教会婦人宣教師カロザーズ夫人によって、築地居留地六番館に開校。フェリス和英女学校とともに最

陽の姉春子は、陽に先立って明治十年、手島精一と結婚している。[19] 手島は、明治七年米国留学から帰朝し、東京開成学校の監事に任ぜられ、翌九年文部省八等出仕、同年四月には田中不二麻呂らと共に米国百年期博覧会のためフィラデルフィアに派遣されている。[20]

津田恭仁と杉陽は、以上述べたように、父が洋学者で明六社の活動的メンバー、しかも明治新政府の開明的官僚であったことで共通している。杉陽は留学帰りの官僚と結婚しているが、後述するように、東京女学校で英学を学んだ者は、明治十年代に欧米の留学先から帰国した者と結婚している者が少なくない。鳩山春子がその典型であるが、彼女だけではない。杉勇氏の談によると、陽は、平井晴二郎と結婚後、若くして亡くなったそうだが、津田恭仁と杉陽の少女期の研鑽がその短命によって十分生かされなかった姿は、あたかも官立東京女学校が、文部省による指導的革新的姿勢によって創設されながらも、政府や社会の進歩派保守国粋派の権力争いの中で短命のうちに消えて行った明治「学制」期の教育政策の短命さにも似ている。

## 二、留学生や外交官との結婚

### (1) 中村せん

「私が生れた時、母は病気で祖母が母の食事を作っていた。使用人が大勢いた。祖父もいた。母ははしかにかかっていた。私の郷里は吉田で、ある人はこれを三州と呼ぶが、三州は、私の郷里から少し離れている。幼時私は兄弟が三人いたが姉妹がないので淋しかった。男の子の遊びはハードで一緒に遊べなかった。

当時父は不在で京都、ついで大阪に滞在していた。一番上の兄は私をとても可愛がってくれたが、私の三才の時亡くなった。次兄も私の四才の時亡くなり、下の兄だけ死なずに現在東京府に住んでいる。私の母方の兄弟が同じ町に住んでいたので従姉妹と夏の夜はおにごっこをして遊んだ。五才の時、祖父母が相ついで亡くなり、私は七才で東京に来てはじめて父に会った。私の上京する前に、父は上野の戦争に従事した。（東京にくる旅）を春に出発したので気候は暑くも寒くもなく快適で、私は道中を遊びながら行き、母がとても早く歩くので走って追いつき、やがて又、私は、私と同年齢位のお付きの女の子と道草し、母が非常に遠くまで行ってしまったのを追いかけた。富士のそばを歩いている時、天候が悪く富士山がみえず残念だった。横浜についた時天候はよくあちこち文明開化の地を見物した。

この女学校に入学した当時の先生はヴィーダー夫人であった。当初は第一学年（最上級）は該当者がなく、赤井、武田、ホシ、サワダさんなどが当初、第二級にいた。その下に阪本、青木、キクア、板倉、マチヲさんなどがいた。最初の校長は小杉先生ではなく、松隈先生であった。」

### (2) 富永　鉑（けい）（満十才）

「私の父の名は発叔（ハツヨシ）、母はキチで、姉妹二人、兄弟が一人いる。

八―一九一七）は近代日本官庁統計学のパイオニアである。静岡県士族で幕府の開成所教授（直参）であったが維新後、はじめは明治政府に仕官することを望まず駿河に徳川家達に従って移住する。娘陽は父が新政府への仕官を好まなかったことを幼いながら聞き知っていたらしく作文でもそのことにふれている。杉亨二は、静岡学問所で二等格学問御用取扱に任ぜられた。[14] 翌明治二年、彼は沼津、原、府中、江尻、清水港で「人別調」（人口調査）を実施したが、これは、我国の第一回国勢調査（一九二〇）より半世紀も先立っているにもかかわらず、その職業分類が体系的であり、杉の開成所時代のヨーロッパ統計知識の実地応用の見事さ、及び当時の社会経済の発展段階における社会的分業を正しく表わした産業分類的職業分類の持つ意義が最近の経済統計学の専門家によって再認識されるところとなっている。[15]

杉は明治三年に戸籍調査のため民部省に出仕を命ぜられ、同四年駿河から東京へ出てくる。明治七年、太政官に出仕、太政官権大書記官となり、太政官の正式の人口調査を行ったのが「甲斐国現在人別調」（明治十二年）であり、全国人口調査の先行的試験調査として知られている。これより先、杉は、政府に統計調査の前提として四民平等――奴隷の廃止、四民相互の婚姻の自由、士下座の廃止――などを建議しているが、明六社のメンバーとしての面目が躍如としている。

娘陽が静岡から上京したのは、作文から、父の政府出仕の明治四年頃とみられるし、ヴィーダー夫人に習ったというから同五年の開校直後から入学したと推定できる。四民平等を政府に建議する開明的官僚がその娘を政府設立の女学校にいれたという図式ができ上がる。陽の甥にあたる杉勇氏（前東京教育大学教授）が父四郎氏（陽の弟）から聞いた思い出によると陽はとても元気な女の子で、箱根の峠で追いはぎに会った時、父の亨二は陽が女の子だしとても逃げきれないだろうと思ったと亨二から聞いたという。

明治十年に東京女学校が廃校になってからも陽は、英語を外国人から個人的に習い勉強を続けたことが、鳩山春子の自叙伝から知られる。

「ある日偶然にも竹橋女学校時代同級の方で前の高峰秀夫氏の奥さんや、平井晴二郎氏の前の奥様が西洋人について英語を勉強していられると聞いたので色々とお尋ねに上って私も一緒に勉強することにさせてもらいました。この西洋人というのは当時駿河台に居たミセス・ウワイコップ[16]という米国夫人でありました。月謝は随分多額であったと覚えて居ります。授業時間は毎朝二時間位で、原書で理科、博物、歴史等色々なものを読んだのであります」[17]とある。後に高峰秀夫と結婚したのは後述するように中村せんであり、平井晴二郎と結婚したのは、杉陽である。

平井晴二郎は、東京開成学校（中退）を経て明治八年七月文部省留学生として工学修業のため五ケ年間米国留学、レンセラー工学校においてシヴィル・エンジニアの学位を受けて同十三年帰国、開拓使御用掛を振り出しに、技術官僚畑を歩み、明治四十一年鉄道院副総裁を経て貴族院議員になっている。[18]

うどオランダ留学のため、咸臨丸に乗船し、下田港まできたが、乗船中の者も次々とはしかにかゝり、船は出発できない状況にあった。真道の当時の手記には次のように記されている。

「七日の朝、江戸に使やりつるに、十三日の夕つ方帰り来りぬ。妻子ともに麻疹になやみけるよしなり、されど緑児のはいとかろく、妻のはよの並なりけりとぞ。」[7]

軍艦組として乗船していた者も一人、麻疹のため七月十七日死亡する。真道らは、下田の常楽寺に葬り、「あはれ露よりも果なきは人の命なりけり」[8]と記している。同年十月二十三日付けの真道の手紙はジャワ島バタヴィア（ジャカルタ）港より妻仲子に宛ててあるが、娘を案じ、「かへす〳〵おくに事追々成長いたし可申間、必〳〵おこたらずおんきをつけられ御そたて専一にそんし入まゐらせ候」[9]と書き送っている。オランダでフィセリングから法律学、経済学などを学んだ真道は、慶応元年（一八六五）帰国するが、その帰国の夜のことは『津田真道』が次のように伝える。

「是より先、真道の和蘭行の途に上るや、家を岳父宗兵衛氏の邸隣駒込御組屋敷に賃し、室今井氏をして伯母某と共に住せしむ。今井氏真道帰国の報に接したるも、其帰家の何日なるを知らず。二十九日夜既に三更、女くに子既に褥に寝し、伯母と燈下に裁縫す。偶々啄々戸を叩くの声あり、誰何すれば、唯我帰りぬと云ふのみ。而して入り来れるは真道也。容貌変じ尽して扮装又異なる。一見別人ならざるかを訝れりといふ。」[10]

維新後、旧幕臣として静岡に移り、静岡学問所校長となる真道の家族は二度にわたる静岡と東京との往復という維新期の混乱の中を生きるが、娘恭仁の教育は怠っておらず、三才から母による書物の手ほどきを受け、六才からは教師について学びはじめている。明治三年から二年間は両親のみ上京し、恭仁は、静岡に残って勉学を続ける。八才から十才まで親から離れて学ばせるということは、娘恭仁への熱心な教育の姿勢がうかがえる。明治五年二月に恭仁が東京へ呼び帰されたのは、同じ月に政府が設立した女学校に入学させるためであったと考えて妥当であろう。

新政府の高官であると同時に、わが国最初の学術研究団体ともいうべき明六社員でもあった真道は、フィセリングの思想にもとづいて個人の生存の自由と権利の思想、四民平等思想および立憲思想を啓蒙し、『明六雑誌』に多くの論文を発表しているが、婦人の啓蒙にも関心をよせ、「夫婦有別論」「夫婦同権弁」などを書いている。

真道の長女として父のオランダ留学の年に生まれ幕末から維新にかけて外国のことを親しく耳にしたであろう恭仁にとって東京女学校という英学中心で始まった学校はまさにふさわしい学びの場であった。父真道は、明治六年に恭仁を含めた家族の写真をフィセリングに送っているが、維新前后の混乱期を経てようやく家族が一つになれた落着きが感じとられる。[11]恭仁は成人して谷森真男（明治二年少史、同十二年太政官権大書記官、のち元老院議官、貴族院議員）と結婚後、数年にして病没するが、[12]作文に病弱であると書いていることが示唆的である。

杉陽の経験した少女期も津田恭仁と似ている。父杉亨二[13]（一八二

を道に捨てていこうと考えたが戦争にならなかったので私は命びろいした。

私が七才の時、幕府と朝廷が戦い、幕府は戦力が足りず倒れた。そのため私は沼津へ行くことになったが大伯父、伯母、家族や友だちと別れるのが悲しかった。沼津へはカゴに乗って行った。私は旅が好きで横浜では外国人の住居をはじめて見て美しいと思った。箱根の峠は素晴らしかったが私たちはそこで追いはぎに会った。箱根の宿の湯は熱すぎも冷たすぎもせず一日に六回も入った。木製のおもちゃなどがいろいろ売られていた。

沼津では大きな農家に住んだがその家の主婦が病気で亡くなったので親類の家に移ったがこの家は遠くて富士の近くにあった。たくさんの湖があり魚も豊富で私も魚をとった。河原はすばらしく大きく広く山から水が流れてきて大小の石を運ぶ。これが田舎である。その後沼津に帰り四年間を過した。春には友だちと小高い山に行き花を摘んだり花壇を作った。今日の作文の出来はとても悪い。というのは日本語の授業がとてもむつかしいので。だからごめんなさい。次にはもっと長く書きます。（中略）

父が新政府から呼ばれて東京に行ったがそれを好まず沼津に戻ってきた。しかし再び強く要請されて上京することになった時、私はとても嬉しかった。帰京するとすぐこの女学校に入学した。ヴィーダー先生が外国からの女性で私は英語のＡＢＣも知らなかったのですごくおそろしく思った。一年後にあなたがこの学校で教えてくださるようになり、みんなは、あなたがとてもいい、親切な人だといっている。アメリカへ帰ってしまわれるのがとても残念だ。」

官立東京女学校に入学した生徒の中には、明治新政府の開明的官僚の子女がいたことが作文よりわかる。津田恭仁と杉陽はそれぞれ津田真道と杉亨二の娘であった。彼らは新政府の官僚であると同時に明六社のメンバーでもあり、西欧の文明を紹介する啓蒙思想家として活躍した。

津田恭仁の作文は、当時満十二才の少女にしては実に正確な内容であることが文献よりわかる。津田真道は、津山藩出身の法学者で嘉永三年（一八五〇）江戸で箕作阮甫、佐久間象山に兵学、洋学を学び、安政四年（一八五七）蕃書調所教官となった。文久二年（一八六二）オランダに留学、同行者に西周作（周）、内田恒次郎（正雄）、榎本釜次郎（武揚）、沢太郎左衛門（貞説）、赤松大三郎（則良）、伊藤玄伯（方成）、林研海（紀）などがいた。[5] 慶応元年（一八六五）帰国後、開成所教授となり百俵二十口の幕臣に列せられた。維新の際、幕府の静岡移封に伴い、明治元年十月静岡に転居した。翌明治二年正月徴されて刑法官権判事に任ぜられ帰京。同八月静岡藩小参事に任ぜられ、再び静岡へ行くが、明治三年十月再び徴されて帰京。翌四年には外務権大丞従五位、司法中判事などを経て、明治九年、元老院議官、同十八年高等法院陪席裁判官を経る。同二十三年、衆議院議員に当選、初代の副議長になり、明治三十三年男爵となっている。[6]

津田恭仁が生後六ケ月にしてはしかにかかった時、父真道はちょ

榎本、赤松の諸氏及び他にもいたが名前を忘れた。駒込に転居して生後六ヶ月目に当時流行のはしかにかかり、二十日間病気になったが七月七日に回復した。これ以後私は病弱になったが母は私に三才の時から日本語の書物を教えた。やさしい書物であったが、当時の私にはとても難解であった。私の家の庭には大木があって小鳥のさえずりがやかましく多くの人が見にやってきた。四才の時に父がオランダから帰国したが、翌年春に帰国とばかり思っていた母は誰かといぶかった。私はといえば父の顔を知らなかったので父とは思えなかった。翌年九月父は京都に行きその留守中の十月に妹が生まれた。父は次の月に帰宅した。

六才六ヶ月六日目から私は習字を習いに先生の所に毎日通った。ある人は六才六ヶ月六日から学びはじめると学問を好きになるというが、私はそれは本当ではないと思う。次の年（明治元年）私の弟が一月十五日に生まれ名前をショーイチロウとつけ両親はとても可愛がったが七月に亡くなり私はとても悲しかった。この年五月十五日に上野彰義隊の戦闘があり、十月に駿河に転居した。その旅行中に江ノ島と弁天の岩の祠を見物したが、それは上部が岩で聖なる水が上から湧き出るのでまわりは湿っていて暗く、案内人はランプをもって先導した。穴の一番奥に石製の二匹の大蛇と二つの大きな鏡があった。次に箱根に行き温泉の湯はきれいであった。とうとう駿河に着いた。沼津から清水港まで短時間船に乗ったが遠くの方で鰹が水中から飛びはねているのが美しかった。翌年（明治二年）三月に東京に帰ったがその途中、三島や鎌倉の八幡宮と岩の穴を見物した。昔、後醍醐天皇の皇子である護良親王は善良で聡明であったが非常に邪悪な者によってこの穴に幽閉されたのだ。帰京後、駿河台に住んだが庭が広く小山があってその上に登ると東京の全貌をみわたすことができた。大きな桃の木や桜の木があり花が咲くと美しかった。翌年（明治三年）一月、我家は再び駿河に移り二月から毎日先生の所に通って習字を習い、四月からは書籍の読み方を習った。五月七日に弟が生まれ父はとても喜んだ。十月に両親は東京に戻ったが、九才になっていた私は日本の書籍と和歌を勉強するために先生の家に預ってもらい駿河に滞まった。十一才の二月（明治五年）、私も東京に戻り五月からこの女学校に入学した。この年弟が生まれた。私はたくさんの日本の書物を学んだ。英語の本はそれ程むづかしくはないが、日本の書物はむつかしい。

（明治七年）五月二十七日（土）記」

## (2) 杉　陽（満十二才）

「私の生まれる前から私の家には小柄な年配の婦人が奉公人として住んでおり彼女はとてもやさしく親切だった。私が生まれるとともかわいがってくれ、私は母よりも彼女を好きだった。私は踊りと三味線をしたかったが父が好まなかったため習えなかった。私を愛してくれた婦人が帰郷してしまった時、私は一晩中泣いた。私の一才の頃、アメリカの将軍が通商を求めて来日したが、日本がそれを欲しなかったのでアメリカの将校は怒って戦争をするといい日本人は非常に恐れた。私の父も非常に心配し、もし戦争が起ったら私

# 官立東京女学校の基礎的研究

## ――在学生の「生活史」の追跡調査――

碓井知鶴子

## はじめに

官立東京女学校（明治五年設立、同十年廃校）はわが国の近代女子教育の出発点において政府が女子教育に対して進歩的革新的態度で臨んだ点で女子教育史上、高く評価されている。特に男女の教育の同一水準ということと、英語を主とした教養主義の発想は文字通り啓蒙思想を体現していた。それが早くも、明治十年には廃校になり、女子師範学校に吸収されたことは、わが国の女子高等教育が私学を除くと教員養成という形でのみ発達したこと、そして、男子とは別の教育路線がつくられていったことを意味する。従って東京女学校の歴史的、制度史的意義は早くから指摘され、先行研究[1]もみられるが、東京女学校に在学した女学生については、鳩山春子の『自叙伝』に頼るケースが殆どである。当然ながら、独立した学校史などはなく資料も少ない[2]。

本論文では、東京女学校で教えたお雇い外国人女性のマーガレット・グリフィス[3]（Margaret Griffis）が明治七年六月、帰国の直前生徒たちに書かせた英文エッセイ「生活史」（History of My Life）[4]を手がかりとして追跡調査し東京女学校生徒像の復元を試みたい。

なお、英文エッセイは名前の書いてあるものだけで三十名程あるが、今回は、その名前から追跡して家族、特に父親の職業や地位などが判名した八名の女学生について報告する。なお、できるだけ原文に忠実に訳したが、意味不明個所及び繰返しは省略し、（　）は筆者がつけた。

## 一、明六社メンバーの子女たち

### (1) 津田恭仁（満十二才）

「私は文久二年一月二十六日に東京下谷御徒町、和泉橋通りに生れた。同年六月父はオランダに留学し同行者に林、西、沢、内田、